

原著論文

大島鎌吉のスポーツ思想に訊く (5)

—生産体育論という視点において—

Discussion on Kenkichi OSHIMA's Sports Ideas (5)
: A Viewpoint on the Theories of Productive Physical Education

伴 義孝

Yoshitaka Ban

Abstract

One of the founding members of Osaka University of Health and Sports Science, Kenkichi Oshima assumed postings as vice president and professor at that institution in 1965. His major field of research was the "Theory of Productive Physical Education (Seisan Taiikuron 生産体育論)", on which he lectured for the rest of his life. After the Second World War, nuclear energy, electronics, automation, and other technological innovation begun alongside radical industrial and economic development. Oshima called this radical development "condensed innovation (Asshuku Kakushin 圧縮革新)". The technological innovation called into question by Oshima was the "means of production" upon which mechanical civilization depends. Through that innovation, the harmonious pattern of physical labor, of consumption and production, has collapsed. Consequently, people of today have been forced to reconsider "how to manage the appropriate way of life".

Here is the starting point from which Oshima launched his "Theory of Productive Physical Education". This paper seeks to examine the discussions around the "Theory of Productive Physical Education" that Oshima advocated in the 1960s and will also make the discussion deepen furthermore.

キーワード：生産手段 近代化 生活世界 生き方

means of production, modernization, lifeworld, way of life

1. 緒言

大島鎌吉(1908～1985)は大阪体育大学の創設構想メンバーの一人である。1965年の開学と同時に副学長兼教授に就任し、生産体育論を終身に亘って講じた。ちなみに「生産体育」は大島の造語なので、説明が要る。

人間は消費動物として生産と密接な関係を

もつが、食べるもの着るものを作らなければ生きていけない。これらを生産するには生産手段が必要だが、何よりも第一は人間の労働力だろう。労働力は健康と体力がその前提だが、ここで体育が問題となってくる。(大島、1973、p.20)

動物は生きるために動く。だから内発エネルギー

1) 関西大学名誉教授(大島鎌吉スポーツ文化研究会主宰) *Kansai University Professor Emeritus (Study Group for OSHIMA's Sports Ideas)*

ギーを消費し、食べて生命の再生産を補完する。人間も然り。他方で文化的に生産動物である人間は、知性原理の技術革新「生産手段」を開発し生活世界（ひと・もの・こと）との関係性において、身心一元論の弁証法的循環構造のもとに生きる。だが無策であれば生活世界の調和「生の循環」を破壊する。

第二次世界大戦（1939-1945）のあと、産業経済成長を産出する急進的な技術革新が登場した。大島は「100年を1年にする圧縮革新」と形容する（大島、1976）。かかる新時代には身心一元論の生産手段が疎外され生き方の問題を省察する必要に迫られる。体育学研究と体育実践は、こうした歴史的現実問題に直面し、那邊に視座を定めればよいのか。ここに大島「生産体育」論の構想原点がある。本稿では、「生産体育」にかかわる議論を検討してみて、大島構想の核心を見極めたい。

2. 新領域の開拓

1980年、学校法人浪商学園の理事長野田敏彦（1926～2003）が確認を求めた。「…大学設立の出発点は産業と体育との結びつきにある。その建学の精神が、生産体育・社会体育・学校体育の三本柱なのは、いうまでもない…」（野田、1980、傍点今次）

1964年12月18日、内報が当時の理事長野田三郎（1890～1975）に届く。斬新な教学方針を掲げ「大阪産業大学」として申請したのだが、文部省に名称が不適切だと勧告され「大阪体育大学」に変更して認可された。構想中の三郎は浪商学園の評議員を務める中沢米太郎（1903～1984）の意見を重視した。中沢は1928年五輪で旗手を務め棒高跳六位入賞。戦後は大阪で体育教員となり、1946年からの岸和田市立産業高校の校長時代には「戦後復興は産業教育で」と力説し、補完のためスポーツ教育（部活動）にも力を入れた。

三郎が中沢に体育系大学を設立したいと助言を申し入れ、中沢が「相談相手に東京オリンピック選手強化対策本部長の大島を推薦した」のである（中島、1993）。大島は中沢を戦前から信

頼している。1963年の夏、中沢と三郎と野田敏彦が大島を東京に訪ね、大学構想の相談が進んだ。1980年の大島が語る。

話が熟した頃、コースに生産体育を一本立てたらと希望した。関西に最初の体育大学ができる、そこで労働者の健康体力について新領域を開拓するのは素晴らしいと思った。（大島、1980、傍点今次）

けれども開学から15年後に、野田敏彦と大島二人して「生産体育」に連なる経緯を書くのには理由と展望がなければならない。

3. 「見切り発車」の真意は

1980年の大島回想が、「見切り発車の生産体育」と前置きし、内意の一端を説く。

必要な生産には、肉体労働をとまなうのだが、知識の進歩と怠惰がこの原理を貫かせない。明治革命の知識偏重肉体軽視思想の定着、すなわちそれまでの身心思想（身心一元論）を心身（心身二元論）に逆転、教育思想と制度を改悪した。その後遺症は戦後占領下の教育法改正の際にも残った。（同前、傍点補注今次）

このさい進歩とは、近代化の基調「成長路線」を云う。そして怠惰とは、日本の近代化過程に受容した「絢爛たる西欧文化」の選択視点が有用性の論理（プラスの増志向）のみに設置されていた経緯を云う。即ち国策「列強へ追いつけ、追いこせ」のもと産業革命の推進基盤「西欧文化」の寸借に国づくりを委ねた結果、その後遺症「危機問題」を現代社会にまで放置させたのである。大島が謂う。

技術革新は双刃の剣である。プラスの増はその分だけマイナスを産む。わが国ではプラスに性急でマイナスをネグったが、いまでもその特殊性から、被害が他の工業国以上に顕現している。（大島、1976）

問題は、西欧文化の受容過程における至上目的「プラスの増志向」が蓄積させた危機問題に由来する。即ち明治革命以来、進歩的な西欧文化の「鵜呑み・無批判」に終始し、かつその終始を野放しにする怠惰「偷安」を許してきた。

斯くして戦後日本の生活世界に三重の危機問題「鴉呑み・無批判・儉安」が巣食ってしまった。(伴、2013、p.72)

では改悪とは、何なのか。心身二元論の近代ヨーロッパ科学主義への過剰な迎合「生き方」がそれである。圧縮革新時代の到来で迎合が常態化し、経済界や政界、文化界や学界、そして巷間の人心にまで、固着する儉安(後遺症)が広がった。この儉安の社会病理化が改悪の象徴なのである。(同前 pp.2-3)

「技術革新のマイナス防止を怠るな、怠る儉安を許すな！」

斯くして大島箴言「許すな」は、後遺症「知識偏重肉体軽視思想」を戦後さらに助長させた教育界にも向けられた。ならば体育ではどうなのか。1980年の大島が「見切り発車」と見越したのには理由が二つある。一つは構想が先見的に過ぎて議論が深まらなかったことで、他は体育学研究の未成熟の問題である。

従来の体育系大学、学部は、教員を養成するのが本命になっている。したがってカリキュラムもしばられ、日本の学者は一つのジャンルに突っこんでいく。また現場から問題が提起されない。(大島、伊東春雄対談、1977b、傍点今次)

こうした状況はすべての学問領域における共通課題である。だがしかし技術革新の進歩に幻惑され怠惰と改悪に甘んじてしまった。教育学の定着過程に訊き出せばよく判る。

4. 「問題情況」の捉え方

村井実が1970年代情況の教育学を「戦後30年を経た今日も、あるいはますます、相互に無関係な思弁と実証の奇妙なより合い世帯である」と見定めた。さらに「天から吊られた頭と、地上につながれた手足のあいだに、体の根幹を見つけれない」と追及する。また教育における「事実・行為・現実・現象」だけを直接の研究対象に措定することを教育学者として拒否した。事実や行為が生活世界の在り方を先導する社会装置「政治と経済」から独立して現前するはずがない。そう見定める所以である。(村井、

1976、p.76)。

特定の教育課題の解決が求められるとき、事実や行為が複合的な統一体(生活世界と人間の弁証法的循環構造)の中で、如何なる関係性の問題に曝されているのか。状況を糺す必要がある。無視すれば教育は成立しない。体育も然り。実は教育にかかわる問題情況を時機相応の研究対象に措定し、経験科学の手法を以て追究するときだけに、自律性を主張できる「教育問題の科学」が確立する。

新聞記者時代から大島はスポーツ・体育に介在する問題情況を追及し是正を反省的实践者の立場から率先した。例えば1955年には、体育学の確立に向け一役を担って全国都市体育研究協議会と日本体育学会を主催者に仕立てあげ、西ドイツからケルンスポーツ大学の学長カール・ディーム(1882～1962)を招聘している。11月13日に来日したディームは、第4回日本体育学会の特別講演を皮切りに、全国主要都市で三週間に亘る講演行脚を实践した。演題は「ドイツ体育の現状・総合教育と体育・青少年生活と体育」の三件である。すべてを企画した大島が招聘理由を語る。

ディームは戦前派の人々に文句なく通った名前である。しかし戦後は余り紹介されていない。このことは日本人という人種は元來がダボハゼで投げられた餌は何でも彼でも飛びつく性癖がある、というよりは、この間の戦争による恐るべき時代の変転が、文化導入の窓口をアメリカ人方だけに開けた事実に基づいている。(大島、1955、p.426、傍点今次)

大島用語「ダボハゼ」は、西欧文化の受容過程において、当為のマイナス防止を怠ってきた事実を難詰する反語である。反語は「米国の生活力と機転に創意を加えた教育技術的な体育・スポーツ」に幻惑されてきた日本体育学会や日本体育協会へも向けられている。

圧縮革新が日本列島に上陸すると、台風のように風速を増し、政治・経済・社会・文化・思想・教育など全領域にわたり、明治革命、敗戦革命に劣らぬ激変を連動させ

た。（大島、1976、傍点今次）

ここでは三次に亘る日本の教育改革を確認しておく必要がある。第一の教育改革は明治革命期における近代教育の導入で、第二の教育改革は敗戦占領下におけるアメリカ型民主教育の導入である。第一の教育改革では戦争へ国民を巻き込んだ。第二の教育改革では、アメリカ型実用主義「プラグマティズム」に幻惑され、学界と文化界までが反省的实践課題「当為の敗戦革命」を反故にした。結果的に中央教育審議会の1971年提唱「第三の教育改革」の自律すべき時代に至っても、近代教育の不備「知育偏重」を反省することなく緊要の「マイナス防止」を怠ったのである。

大島は、掛け声倒れのままの第三の教育改革を追及して、制度設計「生涯教育体制の確立」の不備を指摘し、1975年に改革試案「センチュリープラン」を公的に発表した。その顛末は後述する。体育 physical education を「身体の教育」と定義するとき、体育学研究は上述の問題状況をどう捉えるのか。

5. 「生き方」の思想形成

個々人の生き方の思想は境涯が形成する。大島の場合は「戦争」と「スポーツ」における特異経験が働いた。明治41年（1908年）11月10日石川県金沢市に出生した大島は少年時代を軍国主義教育のもとに育ち、自らは生産体育「陸上競技」に打ち込んだ。三段跳で活躍し1927年極東選手権大会で銀メダル。1932年五輪ロサンゼルス大会では銅メダル。1934年に世界新記録「15尺82分」を樹立。同年大阪毎日新聞の運動部記者となった大島は、選手生活も続け欧米州への遠征で変転する世界情勢を肌身で体得した。1936年五輪ベルリン大会では選手団の旗手を務め六位。

二回のオリンピックでスポーツの師と敬愛するディームに邂逅し、生涯を貫く対話の現場「ドイツチャンネル」を構築した。奇しくもディーム編集で1936年出版のドイツ語版クーベルタン本『オリンピックの回想』をベルリンで入手し、戦前の大島は日本で辞書を片手にクーベル

タン（1863～1937）のオリンピック思想「オリンピズム」を独学した。

1936年7月31日、ベルリン五輪開会式の前日、I O C総会で1940年東京五輪の招致が決定。だが二年後の1938年7月15日、日中戦争（1937-1945）の激化で返上された。I O Cの調整で1940年ヘルシンキ五輪の代替開催が決定。このように大島記者は「オリンピックと戦争の問題」に深く関与することになる。斯くして1939年3月1日、専門誌『陸上競技』に緊急提言「第八回国際学生競技大会に学生選手団を派遣せよ」を書く。

今回のドイツ行だけは、決行すべきが、防共紐帯国民としての義務履行であると考えろ。（大島、1939、p.24）

東京五輪返上に連動し国際大会すべてが禁止となり、放置すれば国際スポーツ界で孤立し青少年に犠牲が押しかかる。打開すべく大島が「本計画はハーケンクロイツの国へ文化挺身隊として突撃することだ」と絶妙に提言した。斯くして選手団長に選任され1939年6月10日にドイツへと出航。そのとき使命を携えていた。1940年に「60人の選手団」を日本がドイツへ派遣、便乗してヘルシンキ五輪へ参加する。1941年にはドイツが日本へ。大島が新たな日独文化協定（使命）をディームの尽力にも与って成立させたのである。

ところが遠征中の1939年9月1日ドイツがポーランドへ侵攻し世界大戦が勃発した。大島は選手団を引揚げ船でニューヨークまで引率。現地でベルリン特派員の社命を受け、選手団を日本へ見送ったあとドイツへ単身の逆戻り。足掛け七年間に及ぶ悲惨な戦争経験は大島著書『死線のドイツ』（1947）に詳しい。ここでは戦時下の特異経験に注意する。

1940年ヘルシンキ代替五輪の組織委員会は大战勃発後も開催準備を続行した。フィンランドの大会返上は開戦八ヵ月後の1940年4月23日である。これを受けI O Cが中止決定。ベルリン特派員の大島はこの間の現実把握についてディームとの対話を経て視点（ものの見方）を培養させた。他方でドイツ語を磨くためドイツ

語版『オリンピックの回想』を読み熟した。戦時下の特異「対話と熟読」経験が大島のオリンピック理念を深めたのである。クーベルタン回想が真髓を語る。

その昔、作家や芸術家がオリンピアに集まり、古代の各種スポーツの周囲を取り巻いたことは偶然ではなかった。大会が威信をもってたたため集まったが、威信のあるかぎりこの大会はつづいた。わたしはその形態ではなくて、1000年もつづいた大会の根本原理を現代に復興したいがために、また大会の中に人類全体に対して重要な意味をもってきた教育学的指針を発見したいがために、かつてそれを支えた強力な柱（近代へのオリンピック復活）をうち立てようと試みなくてはならなかった。（大島邦訳クーベルタン本、1962、pp.80-81、傍点補注今次）

大島にすればスポーツもオリンピックも同源の教育学的指針に根差すものとして認識された。オリンピック運動の核心は上述の意志と営為に内在されている。従って1939年の大島が担った1940年ヘルシンキ五輪参加への環境整備も等質である。1945年5月8日ドイツ無条件降伏。5月2日のベルリン陥落を見届け大島は死線のドイツを脱出、1945年8月1日に日本へ生還。8月6日広島へ原爆投下、9日は長崎へ。8月15日の敗戦布告と占領下の日本情況。大島は毎日新聞東京本社ですべてに立ち会った。大島が独白する。

内地にいたら赤紙一枚の徴兵、太平洋の孤島かビルマで戦死していたはずだ。そう思うと「この死に損いは、やりたいことは、何でもやってやろう」とその後の生き方を決めた。（大島、1982、p.176）

近代化路線の最大の過誤は戦争である。戦争の最大の犠牲者は青少年である。歴然とした事実が死線のドイツと占領下の日本で実見した戦争の惨禍だった。だから終戦直後の大島は明日の日本を担う青少年のため自らに課す命題「スポーツで何ができるのか」を決めた。斯くして大島の生き方の思想形成が凝縮する。あとは実

践課題を残すだけである。

6. 1949年と1955年の問題提起

1945年9月15日、文部省が「新日本建設ノ教育方針」を発表。方針の一つに「科学的思考力の重視」が掲げられた。斯くして占領下にアメリカ信仰をつのらせ、文化導入の窓口をアメリカへ向ける。一方で学界や文化界が、デューイ(1859～1952)のプラグマティズム「実用主義」に共振する。デューイは、学問と実践を分立させた従来の近代教育をアメリカ型民主主義教育の立場から批判した（デューイ、1916、p.355）。二点がある。一点は労働層と知識層の垣根を取り外せとする提唱で、他は自己充足的な教養教育と実用的な職業訓練との分裂を是正せよとの主張である。このかぎりにおいて誰もが賛同する。

一方でデューイは近代ヨーロッパ科学主義「進歩成長路線」は踏襲した。そして「目的や欲求を適合させる」実用主義が「真の知識である」と唱える（同前、p.454）。要するにデューイは社会の進歩「人工物」に適合するよう「人間の生き方を改変せよ」と主張したのであって、大島問題意識「マイナス防止志向」からすれば本末転倒になる。戦後日本の教育改革はそのプラグマティズムに共振し、経済発展の要因「科学技術教育の振興」を重視した。経緯には朝鮮戦争（1950 - 1953 休戦）の特需景気を契機に始まる高度経済成長路線が与っている。他方で大島は1949年に生じたスポーツ文化の問題を重視する。

1949年8月16日、全米水上選手権大会の招待選手古橋広之進が1500m自由形で世界新記録「18分19秒」を樹立し世界を驚かせた。占領下の日本では、フジヤマのトビウオと喧伝された古橋快拳を真似る子供の遊び文化「古橋ごっこ」が広まり社会現象となった（伴、2013、p.191）。時機相応に大島が身体文化「遊び」の根底に潜む生命原理の目に見えない価値問題に関係づけて論文を書く。

高く跳び、遠く跳ぶ子供は、それだけ広い世界を支配する。その子供には、他に比して別の世界がある。個々の人間が、それぞ

れ別の未知の世界に踏み込んでゆく、自己の発見と共に、他の世界を探求してゆく。ここにスポーツ文化の価値がある。（大島、1949、p.47、傍点今次）

遊びやスポーツにおける発見と探求は、生産する行為と等質であって、教育全般の実践課題のはずである。実に大島「生産体育」論の原形は1949年論文を以て既に提示されていた。同論文の結語「今こそ優れた体育家やスポーツマンが先頭に立つべきだ」は何を示唆し、何を期待しているのか。こうして二つの「何を」が、1949年の大島が投げかけた問題提起である。同年には新制大学が全面的に発足し保健体育科目の必修制も始まり、連動して1950年に日本体育学会も設立された。期待が膨らむ。だから大島が1955年のディーム招聘を企図したのである。なぜなのか。

スポーツが人間の実在に対して何を意味するのか、人間の実存がスポーツにどんな関係をもつのか。この謎に解答を与えられる人として、カール・ディーム教授の存在に、自然に眼を向けるのである。（大島邦訳ディーム本、1955、p.5）

敗戦革命期の1947年、ディームはスポーツを冠にする世界初の「ケルンスポーツ大学」を創設した。東西ドイツ分断の翌年1950年には「ドイツスポーツ少年団」を創設。両者とも明日のドイツを担う青少年育成に主眼がある。かかる時代相に1952年五輪ヘルシンキ大会へ敗戦国「日独」の参加も認められ、大島は特派員として戦後初の海外渡航の機会を得た。こうしてケルンにディームを訪ねて直接対話が再開する。時節到来である。

ディームは、生理学、生物学から体育・スポーツを究明したばかりでなく、人間完成（生産体育の課題）の観点から体育・スポーツの形態的、現象的なものの奥にある本質的なものを指摘し、これを教育的に展開して精神的、倫理的、形而上学的に組み立てる事業を成し遂げた。（大島、1955、p.427、補注傍点今次）

戦前も1920年にディームは「ドイツ体育大学」

の創設をベルリンで手掛けた。上述は創設理念の大島活写である。そして戦後すぐの1947年には「ケルンスポーツ大学」を創設した。創設理念は同源である。1920年と1947年、二つの異同は何なのか。戦争は最大の過誤である。世界観が対極的に変わった。

スポーツは本質的に（享受の自由性において）個人主義的である。新設したケルンスポーツ大学では（戦前の近代教育のように）画一と集団強制への努力をやらない。全生活を通じて一般的な身体訓練が有効なのはもちろんだが、肉体は新陳代謝して永く建設可能である。その努力（生産体育の課題）は墓場まで続く。この個人的な基礎的方向に教育的最後決定がある。人間的価値の認識は、それぞれの効用にかかわらず、共同社会に対する彼らの価値に関してのみ有効である。（大島、1950、pp.20-21、補注今次）

上述は、やっとな「日独」の通信検閲も解除されて、1950年に大島へ届いたディーム書簡の核心である。スポーツに内在する教育性は人間存在の意味を増幅する。ケルンスポーツ大学はドイツが負うべき当為の敗戦革命の一端を担うべく出立した。同じ戦争責任国「日本」は、何を成すべきなのか。日本体育学会と日本体育協会、ディーム招聘に何を学ぶべきなのか。こうして二つの「何を」が、1955年の大島が投げかけた問題提起である。

7. 「人間づくり」という問題意識

東京で開催された1958年の第三回アジア大会に際し、国民と世界の不信をまねく不祥事が続発して、体協が偽装解散情況に追い込まれた。そのさい大島が懇請され二つの助け舟に同意し1959年4月1日付で体協理事に初めて就任する。一つは東京五輪招致運動の最終段階に、大島が招致委員に任命され無事に切り抜けた。もう一つは、招致決定後も体協機能は麻痺したままで、大島提言を以て1960年1月18日に東京オリンピック選手強化対策本部が設置されるのだが、その責任者を大島が受諾してから始動に漕ぎ着けた。

大島企画「選手強化5ヵ年計画」は空前絶後の実績を残した。そのさい大島の特異であることは「人間づくり」という概念を計画推進の前提条件に押し出したことにある。

多くの競技者は持って生まれた潜在力を開発されぬまま、競技生活を終わっている。ことにトレーニングと技術の理論が未熟で、コーチの方法論的作業が教育学の原則にそわぬ場合、なおさらのことである。そこでいままでのスポーツ界に存在しなかった（身心一元論の）高い次元の選手をつくりだそうとしたのである。選手強化対策本部では、これを「人間づくり」と唱えた。（日本体育協会、1965、大島総論 p.64、傍点補注今次）

実に1964年本番は大成功を取めた。

ところで選手強化の仕事は5年や6年でできるものではない。東京大会対策はあくまでインスタント対策、間に合わせの対策であった。われわれは今後の対策として、次に来る人のために、どうしたらよからうか。（同前、p.174）

斯くして大島は「TOKYO 1964」を「日本のスポーツ元年」と位置づけていた。そのため報告書に「長期20ヵ年計画」を書くのを忘れない。長期展望の存念が深遠である。

わが国の教育制度がはたしてこれでいいのかどうか、これは十分検討すべき問題である。すなわち、社会的、教育的に、体育・スポーツが文明国においてあるべき地位を確保するために、体育協会が先頭に立ってそれを戦いとる態勢を固めるべきではないか。（同前、p.177）

要するに大島は日本体育協会へ実践課題を提示したのである。報告書は1965年3月31日の発行である。大島は残務整理「報告書刊行」を完了した同日に六年間務めた理事を辞任し、翌日4月1日から大阪体育大学へ赴任した。もとより1963年に決心した「生産体育」に打ち込むためである。それでは大島「人間づくり」構想の核心は何なのか。

1962年、池田勇人首相は経団連の要望に応え

「人づくり政策と大学管理制度の再検討」に着手した。所得倍増計画を担う人材養成を大学教育に組み込むためである。それ以降も日本の教育行政は一貫して、いわば「経済戦士養成」を目的にしている。大島「づくり」と池田「づくり」とでは、表記法が意図を象徴するのだが、到達目標において明白に異なる。だとすれば大島「生産体育」論は問題意識を那邊に設置して構想されたのか。

8. 噛み合わない議論

19世紀中葉から20世紀初頭にかけて二つの文化運動「マイナス防止志向の対抗文化」が発祥した。一つは、近代哲学と近代科学を土台とする主流文化「近代ヨーロッパ科学主義」に対決し、ドイツを起点に発祥した哲学運動「生の哲学」である。もう一つは、主知主義教育を先導する主流文化「近代教育」に対決し、フランスのクーベルタンが発祥させた実践運動「近代オリンピック」である。

文化悪は、新しい文化の創造によってしか克服できない。斯くして本稿は「生の哲学」と「近代オリンピック」を歴史的に登場した世直し文化運動「対抗文化」であると位置づけたい。ところで前者「生の哲学」は思想潮流として現在なお西欧文化圏に息衝いているのだが、逆に日本では主流文化でないことを理由に学界ですら無視に近かった。のみならず戦後になるとアメリカ発祥のプラグマティズム主義に迎合し、これら二つの対抗文化を棚上げにしている。特に後者「近代オリンピック」は、欧米ですらクーベルタンの意志とは逆に、対抗文化としての究極の存在理由を不問にしたまま誤認されている。誤認とは、近代化路線「プラスの増志向」にかまけて主流文化と見間違っ、世界最大のスポーツイベント「オリンピック大会」を開催することに直接目的があるとする錯覚である。

このさい体育学研究について吟味すればその虚構の所在が連動して見えてくる。大阪体育大学における議論のひとつに注意したい。

「…生産体育という言葉が使われるようになった。しかし言葉の定義は定まっていない。

似た言葉として産業体育、職場体育、勤労者体育などがあるが、それらの間に厳然とした区別はない…」(加藤、1970、p.1)

このように加藤橋夫の論文「生産体育における諸問題」が論評した。確かに初期の大島「生産体育」論は労働者の健康体力の問題に集中していて説明不足を残している。だが他方で加藤の1970年論文は、目に見えるその表層面に囚われ、造語「生産体育」の解釈にあたって比較尺度「職場体育」を誤認のまま等置させ、結果として議論の発展を阻むと同時に問題性を矮小化してしまった。

加藤は「生産という言葉は厳密に吟味したことはない」と弁明しつつ、「生産体育が学問として成立する」にしても、それは「応用科学であり特殊の分野を体系づける」ことなのだから「プラグマティズムを適用しても不都合はない」と捉えた(同前、p.2)。だがプラグマティズムにあっては、体育もスポーツもレクリエーションも、ときにオリンピックも対象論理で捉えプラスの増志向の利用物「道具」に見立てる。しかし生産体育論は違う。

技術革新による産業主義は現場の省力化を推し進めたが、その反面、公害、疾病など反産業性=外部不経済をどんどん拡散した(大島、1980)

社会病理としての運動不足症(hypokinetic disease)は、圧縮革新時代に至るまで地球上に存在していなく、人類史上初登場の特異現象なのである。実に大島「生産体育」論は、かかる歴史的現実問題に出立点を定めて提唱された唯一無二の試論にはかならない。

目的からいえば、幼・青少年体育は、将来生産人として働く準備、青・壮年体育は生産現場に必要な健康・体力を増進するため、高齢者の体育は知識や経験を後世にバトンパスすると同時に、寝たきりにならないよう実行されるものである。生涯体育の見方から眺めると、あえて制度に基づいて区分するなら、乳幼児の家庭体育(高齢者も含む)、青少年の学校体育、労働者の職場体育である。(大島、1973、p.20、傍点今次)

この1973年の大島論文「学校体育と社会体育の谷間」は、前出の加藤論文に対する回答でもある。さらには1971年の中央教育審議会の提唱した「生涯教育体制の確立」に対する回答でもある。なぜ加藤の議論は噛み合わなかったのか。大島は体育学会でも生産体育について発信している。そこでも議論は噛み合っていない。聞き手は「職場体育に位置づけるのが妥当である」と反論さえする。そうしたとき大島は箴言を以て補足する。

「マルクスや西田幾多郎を読め！」

要するに大島は、体育やスポーツやオリンピックについて議論するとき、現前する文化現象を単に量的研究の視点で扱うのではなく、文化としての発祥原点に立ち返って質的研究の視点から見極めよと指摘したのである。そうであれば生産体育を問題にすると、上述の加藤対応「生産の真義不問」のままでは議論が成立しない。ましてや人間を捉える立場が、身心一元論か心身二元論のいずれかに分立したままでは議論も噛み合わない。そもそも人間は、身体的存在者として主体的に生活する文化的存在者なのである。大島視点はこの原点問題を尊重する。ならば「生産」と「人間」の関係の問題性は那邊にあるのか。

9. 作られたものから作るものへ

日本生還の当座、大島は浦島太郎状態にあったという。戦中の敵愾心「鬼畜米英」から戦後の迎合心「アメリカ信仰」への人心の変わり身の早さは大島にとって異様に映った。そこで生き方の原点を問い直すため書物にも頼った。一つには、同郷石川県出身の西田幾多郎(1870～1945)を読み漁った。他に二点は、前出のドイツ語版クーベルタン本とマルクス(1818～1883)の『資本論』である。大島「生産体育論」の骨子となる用語「生産手段」はそのマルクス経済学から借りている。西田とクーベルタンとマルクスの共通点は身心一元論の原点志向にある。

ここでは西田哲学に訊いておく。生きるということは働くということで、働くということは

歴史的現実の世界において「物を作る」ということでなければならない(西田、1937、p.269)。ここに西田哲学の原点がある。例えば生活世界の構成要素を「ひと・もの・こと」に要約すれば、「ひと」は生活者を云い、「もの」は自然や人工物を含め存在物すべてを云う。そして「こと」とは、生活者が「ひと」と「もの」との関係性において「改変する(物を作る)すべての働き」である。こうして生活世界には自に見えない関係性の問題「働き=生の循環」が介在し、弁証法的相互発展を促す動的エネルギーとして文化的に作用してその文化をも発展させる。このさい文化的作用とは「歴史的世界における自己形成」として「人間が作られる」ことであって、文化発展とは「新しい人間と歴史的世界が形成せられる」ことを謂う(西田、1940、p.331)。

ここに人間形成問題の核心がある。それは池田首相や中央教育審議会が掲げるプラグマティックな人間形成論とは異なる。西田が補足する(西田、1937、p.559)。人間は、生活世界によって作られたもの(文化的存在者)で、同時に生活世界を作るもの(身体的存在者)として「矛盾的自己同一の働き」を媒介して生きる。実に「身心」は、生活世界との関係性において「作られたものから作るものへ」と歴史的(時間的)に社会的(空間的)に改変され続ける。このように生活活動間「生き方」において時間軸と空間軸の交錯する「生の循環」が働かなければ、人間形成は十全に促されない。(伴、2013、pp.449-464)

このさい大島用語「生産」は、西田用語「作る」と等質であって、かかる生産過程には上述の関係性の問題が摂理「生命原理」として矛盾的自己同一構造で常に働く。前出の加藤や体育学会は、その問題「生の循環」に頓着しなかったのだから、大島「生産体育」論の視点「人間形成の問題」に疎遠な立場にあった。なぜなのか。また1980年の大島は、なにゆえに「いまが契機だ」と展望したのか。

10. これからが本命

だからこそ大島は1980年回想を「これから

が本命」と題して書いた。なぜなのか。

大島の記者時代を熟知する朝日新聞運動部の元記者三島庸道が語る。大島は「奇人・変人・怪人」と揶揄されるほど先見性に富んだ行動派で、世界中を取材し理論構築に努めた。記者仲間には理論を聞くのだが「理解できなかった」というか「理解しよう」としなかった。だから東京五輪後に大島が「みんなのスポーツ」の導入を提唱しても、「それがどうした」としか反応できなかった。他方で体協や競技連盟は「選手養成で頭が一杯」のため、聞く耳をもたなかった(岡、2013、p.238)。

斯くして記者連中から「大島は十年先を見て、否三十年先を展望する！」と見做された。同様に学界や文化界もわれ関せずで、実に教育学も体育学も目先のことにしか研究視点をもっていなかった。ところが1970年代になると異変が村井指摘に準じて稀少なのだが始まる。危機意識がそうさせたのである。

先覚者のひとり倫理哲学の湯浅泰雄が「1970年代の日本は戦後思想史の曲り角である」と時代相の変化を二重の意味において看破した。1960年代のアメリカは対抗文化の時代だとよばれる。そのころ15年間におよんでベトナム戦争や人種差別反対運動が起った。こうして生命原理の危機意識を覚醒させた若者が、实用主義偏重の大衆文化(主流のプラグマティズム文化)に対決し、対抗文化「ヒッピー運動」を発祥させた。一方1970年代の日本にはアメリカの大衆文化が「バラ色」のように浸透していた。そのためヒッピー運動発祥の真因「生命原理の危機意識」を理解できず、学界や文化界もアメリカ型の实用主義を助長するばかりであった。こうした二重構造の現実に注意する湯浅は、危機意識に促されて「思想史の曲がり角だ」と見定めたのである。(湯浅、2005、pp.26-28)

本稿の注意すべき問題点は、1960年代におけるアメリカ発祥の対抗文化「ヒッピー運動」は、およそ100年前の西欧で発祥した二つの対抗文化「生の哲学運動とオリンピック運動」と根源的に等質であるという歴史的事実にある。1977年の大島は見逃さない。

省みれば、過去 20 年間、子供たちの遊び場、広場を奪って、大人は工場、住宅、駐車場などを造った。一方、学制の六・三・三制の風土的入試システムは、動きたい盛りの子供を密室に閉じこめた。一週間僅か 2～3 時間の体育時間では生物学的に見てもこんな現象の起こるのは当然だった。（大島、1977a、傍点今次）

大島「生産体育」論からすれば、「こんな現象」が放置できない質的問題なのである。

最近の現象は子供の心臓病ばかりではない。心筋梗塞、脳溢血、脊椎変形症から胃腸アトニー、低血圧、糖尿病、神経症、さらにポックリ病まで及んでいる。発育盛りの肉体と精神にこんな悪魔がモグリこんだのである。（同前、傍点今次）

このさい悪魔とは、弁証法的人間形成の摂理「作られたものから作るものへ」を破壊する圧縮革新への依存状況をいう。先に本稿では外部不経済問題「公害」について議論しておいた。ここでは子供の内部環境「肉体と精神」に「モグリこんだ悪魔」の問題に置き換えて問題点「摂理の破壊」を再点検する必要がある。実に運動不足問題は、生活世界との関係性の遮断「突然異変」に注意するとき、人間の内部環境（人間性）を人為的に破壊する公害問題であって生存問題として省察すべき質的に未曾有の大事変なのである。

斯くして現在の体育学研究は、1965 年の大阪体育大学が世に問うた「産業と体育の結びつき」について、生活世界との関係性の問題を起点にして再考する必要があるか。大島 1980 年回想が補完して希望を述べている。

欧米先進国の 1970 年代の調査では罹病の 60%が運動不足によるもの、その 60%がスポーツで防げると説くと共に経済的プラス面まで計算しだした。国防と生産を国是とする社会主義国の研究は数歩進んでいるが、あすを知らぬ経済の低成長トンネルに入りたいま、生産体育理論が求められよう。国の政策を考えると共に、大学には、学際的研究に鍛えられた、時代に相応しい指導者

を輩出することが求められる。生産体育はようやく舞台にのぼってきた。（同前、傍点今次）

かくも大島は将来展望を書き添える。1970 年代に出現した「村井」や「湯浅」の思潮動向にも期待してのことである。斯くして現実把握の時代相として否定できない圧縮革新時代の悪魔情況に対決するため、そして現代人の抱え込む宿命に応えるため、これからの体育学研究は、新しい領域「生産体育」の問題提起を追究する必要がある。なぜ大島にこれほどの先見的な洞察が可能であったのか。

11. 一本の鎖

19 世紀末のクーベルタンは国際的な選手権大会としてオリンピックを復活させたのではない。実際には「生命の門口にさしかかる若い世代の活動欲」を鼓舞する祭典として、即ち身一元論の生きる力を賦活する青少年育成運動の一環として企図したのである。（大島邦訳クーベルタン本、1962、p.88）

100 人が体育をおこなうには、50 人がスポーツをおこなわなくてはならない。50 人がスポーツをおこなうには、20 人が専門のスポーツに専心しなければならない。20 人が専門スポーツに専心するには、5 人がすばらしい技能を完成する能力をもっていなければならない。こうして一本の鎖は、ひとつひとつの輪が互いに結び合っている。（同前 p.199、傍点今次）

このように 1930 年のクーベルタンが、近代オリンピックを復活させた理念を再確認した。理念「一本の鎖」とは何なのか。上述の「100 人」と「体育」は、現代的課題「みんなのスポーツ」を先取りする理想像を象徴する。「5 人」はクーベルタン想定「オリンピック」を云う。「20 人」は「競技スポーツ」の専念者で、「50 人」は「スポーツ教育」の享受者すべてを云う。ところでクーベルタンは「体育 education physique」と「スポーツ教育」を区別する（同前、p.198）。即ち体育は身体的存在者「万人」にとって必須要件であって、スポーツ教育は享受する文化的存

在者「個人」の主體的な参加意思に基づく。この構図のもと一本の鎖で連結するためには、それぞれ持ち場を異にしている、ひとつひとつの輪「5人と20人と50人と100人」を循環させる無二の共通理念が不可欠になる。クーベルタンもディームも大島も、その絶対理念は青少年の深奥から内発する生命力「生きる力 Grund zur lebensstüchtigen」(邦訳大島ディーム用語)が源泉であると考えられる。

ところで敗戦直後からの大島は、クーベルタン理念「一本の鎖」に相当する適切な思想的概念術語を探し求めていた。大島にとってそれが「生産体育」なのである。即ち生産体育とは、前出の加藤が想定した実践区分「職場体育」の量的な時空間問題ではなく、質的な実存問題として体育とスポーツとオリンピックを生命原理「一本の鎖」で貫いてそれぞれを協働させる仕組みとしての本質規定なのである。なぜクーベルタンは、体育とスポーツを一本の鎖で結ぼうとしたのだろうか。

12. 「理想」の再生を

大島によればクーベルタンとディームは「肝胆照らし合う仲」である(同前 p.3)。二人を結ぶのにはスポーツ文化に内在する理想「生き方の創造」問題が介在する。クーベルタンやディームの青少年時代、体育とスポーツは文化的に乖離していて、近代体育は軍人づくりに主たる目的があった。他方クーベルタンは理想(当為の生活)を復活させるためスポーツ教育に着目する。そのさい理想とは教育現場への導入を願望した古代ギリシアのオリンピック精神「オリンピズム」を謂う。

クーベルタンという人間の中に彼が創った語「オリンピズム」の復活者だけを見付けようとするのは誤りである。むしろ真新しい(身心一元論の)近代教育を打ち立て、そのスポーツ教育によって社会を改変し、社会を新しい軌道(理想)の上で走らせようと願った人であると見るのが正しい。(同前 p.9、補注今次)

これがオリンピック研究家ディームの語る

クーベルタンの実像である。斯くしてクーベルタンは、社会を改変する新しい文化運動として青少年の意識改革を促すため「5人」に象徴される理想発揚の舞台「オリンピック」の復活に着手した。本稿はその尖端「5人」を基底に「20人・50人・100人」を順次積み上げる世紀の難事業を不安定な「逆ピラミッド構想」と命名している。こうして1896年、スポーツ「一本の鎖」で世界を連結するクーベルタン「世界のスポーツ元年」構想が始まった。しかし誰も否定できない理想「一本の鎖」が貫流しなければ成功しない。その理想の問題をクーベルタンと共に追求したのがディームである。大島も共振した。一方で1920年のディームには援軍が現われた。

当時の人間教育学は、体育の広範な領域について、一滴の血のしたたりほどのことしか知らなかった。それは体育というものはグーツ・ムーツやヤーン以後のものであるという浅はかな認識であった。しかしディーム博士は、スポーツのもつ世紀と万有を包括する(古代ギリシア時代の)精神的な関連を示してくれた。(大島、1955、p.427、補注今次)

こう語るのは、1952年の大島がケルンスポーツ大学で邂逅した、生の哲学を受け継ぐ教育哲学者シュブランガー(1982～1963)である。彼は1920年に赴任したベルリン大学でディームから感化を受けた。そして近代化促進のもう一つの動因「フランス革命」(1789 - 1799)の影響を重視し、とりわけ経済的人間と理論的人間の出現(新時代の変化)に注意する(シュブランガー、1918、p.255)。併せて自由競争経済と主知主義教育の陥りやすい構図に、即ち「一面に偏した知性に欠けるものは、内的な文化の創造である」という現実問題に危機意識を改めてつのらせた。

このさい精神文化における知性原理「あたま働き性＝読み・書き・計算」と身体文化における生命原理「からだ働き性＝動く・働く・作る」の合一が成立しないとき、人間の生き方は理想的に統合されない。その源泉がシュブランガーの問う「内的な文化」で、人格形成に随伴する「生

きる力」なのである。一方で生活世界に内的な文化の交錯しないとき、例えば労働者の人格を度外視する機械的生産手段が拡大する。そこには摂理「作られることから作ることへ」の循環が働かない。

だからシュプランガーが謂う。全体的人間の教育が欠如するところ、進歩主義は「外面的な焦燥、競り合い」に終始し、内部に「アメリカ主義の危険」を胚胎させる。そのため「人間醇化のない経済思想」では人間を救えない（同前 p.272）。このさい危険とは、第一次世界大戦（1914-1918）に乗り欧州向け軍需輸出で富を築いた「戦争商人米国」の行動原理をいう。そして人間醇化とは全体的人間教育の求める理想像をいう。理想像の追求には身心一元論のスポーツ教育が欠かせない。このようにシュプランガーはスポーツに介在する万有の理想問題をディームから学んだ。ここに1920年代のドイツにあっては、ベルリン大学を起点にして、スポーツの学際的な研究が始まった（大島、1955、p.427）。

先に本稿は「学際的研究に鍛えられた指導者の育成」が日本の緊要課題であると議論しておいた。それこそが1920年代のドイツで始まった体育学研究の動向を念頭におく大島の1980年展望なのである。他方でシュプランガーは戦後の1947年に創設されたケルンスポーツ大学でも客員教授に就任しディームとの学際的研究を推進した。1952年の大島は二人との直接対話を得て、日本へスポーツの学際的研究を導入するため前述の1955年のディーム招聘を思い立ったのである。

招聘にかかわる一部始終を収載した大島編著『立ち上るドイツ青少年—その足音と近代スポーツ思想—』（1956）が手元にある。同報告書には、ディームにも肉化しているシュプランガー思想の断片が記録されている。実のところ断片には、ディームとの事前打ち合わせで、大島が講演内容に盛り込むように依頼した経緯がある。従ってここでは幾つかを大島の言辞として議論しておきたい。

科学的な技術が支配する社会になると、小

学生の頃から大幅な理論的知識が要求される。したがって生徒は、学校で学び、さらに学ばねばならぬことになる。こうした近代教育に欠けているものは、学んだ知識を理想的に実行に移す能力である。（大島編著報告書、1956、p.252）

こうした傾向は戦後世界の同時現象であって、積み残される負の連鎖はディーム用語にいう「肉体教育 Körpererziehung」（マイナス防止実践教育）を以てしか打開できない。

技術化した人間というものは、以前よりもっと熱心に、計算し、計量し、勘定しなければならない。このような人間は物質主義の捕虜になる。（同前、p.257）

斯くしてディームもまた「スポーツで何ができるのか」の視点に立って提案する。

経済的人間はあらゆる生活の中で功利性の価値を尊重する。問題はこのような類型の人間が常に重きをなしつつあることである。スポーツは物質主義の息の根を止めることができなくても、常に物質主義との長期抗戦をつづける。（同前）

ディームも大島も無垢の存在「スポーツ」へ食指をのばす負の連鎖を見逃さない。近代化路線「プラスの増志向」に固着する生き方は、無垢の存在をもビジネスの対象にする。

スポーツは理想に輝いている。さもなくばスポーツではない。したがってスポーツは理想主義の精神の下で決定的に教育の課題を満たす。（同前、p.258）

こうしてディーム「人格の形成」は、即ち大島「人間づくり」は、対象論理ですべてを捉える経済的人間や理論的人間に特化させることを拒否し、同時にそうした風潮を拒否する。ここにおいて二点を確認しておきたい。一点は、西欧社会において、近代化路線の負の連鎖に対決しマイナス防止「対抗文化」が創出された歴史的問題である。もう一点は、日本社会において、西欧文化の受容過程に三重の危機問題「鵜呑み・無批判・儉安」を放任してきた現実問題である。実に東西文化におけるこの歴史的現実問題「断層」を克服するために構想されたのが生産体育

論である。そうであれば大島展望は那邊にあるのか。

13. センチュリープラン

大島「生産体育」論は子供から高齢者までの「からだ働き性」の問題を出発点としている。このさい「からだ働き性＝動く・働く・作る」の問題は、摂理「作られたものから作るものへ」に拘束される両義的存在者からすれば、生活世界と人間生活の関係性において体育実践の課題であらねばならない。

1964年10月24日、東京五輪は「金メダル16・世界第三位」の大成功を収め終幕の日を迎えた。閉会式に臨む日本選手団長の大島は「オリンピックを東京でやってほんとうによかった！」と自分に言い聞かせた。そして世界と日本の「あす」を見据えて展望する。

オリンピック後のスポーツの国民的振興がどうあるべきか。オリンピックの反省が世界のスポーツの大きな振興に役立つべきだとする、クーベルタンの意志、オリンピックの意思を尊しとすれば、わが国でも他の国々と同じく、問題の焦点がすでにもうここに移っていることを知らねばならない。(大島、1965、p.6)

ここに大島が「1964年」を「日本のスポーツ元年」に定めた理由がある。1964年1月28日、大島選手強化対策本部長は第46回国会において東京五輪後の新しいスタートとする「終戦処理施策」を説明し、「それに対する協力」を要請した。斯くして1965年3月25日、総理府をはじめ体力づくり関係11省庁と200有余を数える民間団体加盟のもとに「体力づくり国民会議」が結成された。

1975年9月1日。国民会議は、おりからの運動不足症の蔓延状況に鑑みて、緊急アピール試案「体力づくりで軟弱と文明病を克服しよう！」を関係各方面へ配布している。試案は大島鎌吉を議長とする国民会議「専門家会議」がとりまとめた。その一環に「センチュリープランの提唱」がある。

「…文明病（運動不足症）は、人の生活構造の

ひずみから生れる。生活構造は自由意志で選択、決定する部分と、環境に影響される部分があるが、いま健康と体力のため決断をくだし行動する時がきた。特に父母たちには子供の好きなスポーツを抑えることなく、自由に闊達に運動させるよう配慮願いたい。政府は、文明病が福祉など経済社会に及ぼす重大な影響を直視し、国民の健康・体力づくりをすべての政策に優先し、まず総合企画機関の設置、長期展望に立つ政策と計画の立案推進など、速やかに実現するよう切望する…」(専門家会議、1975、p.14)

実現目標を2075年に定める構想の骨子を大島が一言のもとに要約する。近代化路線が100年かけて壊してきた生命原理は100年かけなければ修復できない。そのため専門家会議は「第二の学校づくり構想」を計画の中核に据えた。いわゆる前出の第三の教育改革の立て直しとして、全国の公立学校を「0歳から100歳まで」の地域住民に全面開放し、「生徒」との触れ合い文化を再構築する。また市民教育の場を刷新するため、コミュニティセンターとしての役割機能を開発する。そこへ潤滑油としてスポーツ文化を活用する。斯くして現代人が埋没させてきた生活世界（ひと・もの・こと）と生活者との関係性の再生を企図する。大島の狙いはこの一点にある。

1974年の大島専門家会議が見積もった。

国民医療費を見ると、1955年の二千四百億円が1974年には23倍の五兆四千億円にハネ上がった。この上昇率の年次推移は、国民総生産の伸び率、年間10%以上と並行している。この医療費は、医者に支払う直接費だけで、買薬などの間接費を含んでいない。これを合計すると実費七兆円以上、政府の一般会計の30%に当たる。これが経済成長の代償に「からだ」を売った勘定である。(大島、1977a)

大島は敢えて理解の早い数字を用いて説いた。人心がそのように飼い慣らされているためである。しかしその間隙には悪魔が棲み込む。しかも視点を子供の「からだ働き性」の埋没現象に絞るとしても、政界や文化界や学界におい

て原点志向に立ち返って取り組む姿勢は一向に進まない。そうであれば、当為の第三の教育改革として、大島展望の100年計画「生き方の改革指針」は誰が担うのか。

14. 結語

体育やスポーツの基礎に科学的認識を据えて、その根底に哲学がなければならぬ。これが「大島さんの持論」だった。1985年、大阪体育大学の名誉教授三宅實がそう振り返って補足する。スポーツも学問も人間生命のために存在する。ひいては、あらゆる生命が最高の価値である。こうして生命の問題を追及する「生の哲学」から「大島さんの生産体育論」が生まれた。（三宅、1985、p.59）

大島鎌吉は昭和60年（1985年）3月30日に永眠した。上述はその追悼集に載っている。三宅は開学当初からの教養教育「哲学」担当の教授である。1970年代の日本は思想の曲がり角状況にあって、哲学者三宅も村井や湯浅と同様に腐心したはずである。かつ村井がシュプランガー研究者だったことも重なって、大島との対話には意識して臨んだ。

その後の大島「生産体育」論に関する議論は先行研究「生産体育という視点」（伴、2013、pp.401-464）の出現まで途絶えていた。だが大島没後30年に問題提起として「現場」に甦った。大阪体育大学の開学時に最年少教員だった運動生理学の増原光彦が2015年に名誉教授として語る。生産体育の「生産」は、ヒトの健康や文化のみならず、人間の生命力を生成する根本原理を問う。これからの体育はその生命科学の視点から追究する必要がある（増原、2015、p.251）。ここに三宅の1985年指摘が2015年の増原へ実存問題を追求する一本の鎖で結ばれた。このさい実存とは自然の摂理「重力」と闘う身体文化「からだ働き性」の問題である。斯くしてクーベルタン「一本の鎖」思想は、重力の問題をも象徴していて、生産体育論に直結する。大島ならば「いまが本命だ」と期待するはずである。

19世紀後半、生の哲学運動の旗手ニーチェ（1844～1900）が、重力問題を探り上げ「飛ぶ

ことを学んで実現したいと思う者は、まず立つこと、歩くこと、走ることを学ぶ必要がある」と原点志向を呼びかけた（ニーチェ、1908、手塚邦訳本 p.312）。ライト兄弟が有人動力飛行に成功したのは1903年で、10年後の第一次世界大戦には戦闘機が登場する。実にニーチェは、技術革新の増幅させる危機問題を予見したのである。斯くしてニーチェが古代ギリシア人の身体文化「生き方」に倣って「反省せよ」と注意を促す。大島も倣う。

1996年、中央教育審議会が基本方針として位置づけた「生きる力の育成」と「ゆとりの確保」が行政用語として初登場した。だが心身二元論の近代教育が当為の生きる力を疎外してきて失敗に終始している。振り返るなら19世紀中葉の西欧ではニーチェに倣う思潮が抬頭した。近代オリンピックの復活も同源である。上述の失敗は、こうした西欧の思潮動向を省みることなく、例えば身体文化「オリンピック」にしても目に見える「絢爛」にしか注意を向けなかったことに由来する。

現在では課題「ゆとりの確保」が学力低下問題に押しやられ死語になっている。おりしも2005年の中央教育審議会が「学校の教育力」を高め「教師の力量」を強化し「子供の人間力」を豊かに育てる国家的改革目標を量的観点から定めた。そのさいも生きる力の問題は議論された。ところが根拠は、欧米諸国のOECD（経済協力開発機構）が学習到達度国際調査をもとに割り出した量的指針「知識・技能を活用して問題解決を図る能力」を「生きる力」に等置した誤認なのである。

OECDは欧米圏の経済的人間集団なのだから、二つの疑念が残る。一つは、前述の経済的人間のもたらす「一面に偏した知性」は「内的な文化」に対する配慮が欠けるという難点である。他は、現代日本の特殊事情「生きる力の埋没現象」を検討するのに、明治革命から100年以上経つ現在なお、欧米の見積もる経済原理指数を優先する不審である。

2006年の文部科学省は「確かな学力・豊かな心・健やかな体」の調和のとれた人材育成

を、即ち「国際社会の中で活躍できるたくましい人づくり政策」を重点行動計画として発表した。だが骨子は1960年提唱の大島「人間づくり」構想と対照的に異なる。しかも具体策提示の1975年大島センチュリープラン「第二の学校づくり構想」は、「二十年」も先立って「ゆとり教育=生き方の問題」を再生する生活世界の構造改革を志向していた。

知性原理の合理的経済活動を至上目標とする社会では、即ち人間と生活世界との関係性が偏向する社会では、生の循環の源泉「生きる力」は形成されない。こうして明治革命以来の「失われた100年」が、歴史的現実問題「負の連鎖」を累乗させる。一方2006年提示の「健やかな体」の問題は、既に10年前1996年答申の指針項目「健康や体力の向上問題」として提示されていた。そのころ1991年の大学設置基準の大綱化を受け競争原理の導入「大学改革」が始まる。それも教養教育解体と学部学科再編という特徴を担って展開された。その間に体育学研究の趨勢にかかわって特筆すべきことが惹起している。

1996年答申が健康体力の問題に言及したため注目された。実に研究対象にすれば数値に換算でき成果もアピールしやすい。こうして体育に関する目に見える「事実・行為・現実・現象」の量的研究へ執着してこなかったか。その後大学で教養体育の解体が進み教員転用のため学科等の新設が全国的に進む。だがほほすべてが「スポーツ科学部」などと科学を強調した。昨今の行政指針は理工系の科学技術を重視し、文系の廃止すら仄めかす。2016年には軍事研究助成が始まり追従する論調も散見できる。かかる問題状況に体育学研究は無関心であってよいのだろうか。

100年以上前ニーチェもクーベルタンも心身二元論基調の近代化路線が拵える生活危機に対決した。例外である。生き方の問題を追及した戦後の大島もディームも例外だった。翻って「例外」を顧みない要因は歴然としている。そうであれば「TOKYO 2020」に際し、日本の学界と文化界はどう対応するのか。本稿も「科学」は

尊重する。だが有用性論理「プラスの増志向」が先行する生活世界を見つめて、マイナス防止志向を尊重するにしても、生き方の反省的実践課題を誰が担うのか。

体育学研究は新規の生産手段「人工知能」に直面し那辺に視座を定めるのか。いまや生き方の選択特異点（シンギュラリティ）にある。ここに自律する「体育問題の科学」として生産手段の在り方に視座を定める必然性があるろうか。斯くして体育学研究の現実課題は自然の摂理「重力」との関係性を以て成立する対抗文化「生き方の創造」問題であらねばならない。ならば明治革命以来の誤謬「知識偏重肉体軽視思想」を払拭するため現代人の生き方と生活世界の関係性における実践課題「弁証法的相互発展」を担うのは誰の責務なのか。もはや儉安「怠惰」は許されない。

子供にとって身心一如の遊び文化（例えば古橋ごっこ）は、生きる力を培養する生産手段であって、生き方の創造問題（生産体育の課題）なのである。物を作る働きが生き方と生活世界の弁証法的循環構造を生産する。その作用が身体的存在者の人格を形成し文化的存在者の生活世界を発展させる。ここに重力と闘う身体文化の原点「存在理由」がある。

原点問題に視座を定めるとき体育の責任範疇が拡がる。第二次世界大戦以降を圧縮革新時代と表現した大島鎌吉は日本の「三重の危機問題」を追及しつづけた。留意すべきは、大島「生産体育」論はシンギュラリティの時代を見越していたことになる。終戦直後から発信してきた大島箴言「マイナス防止を怠るな！」には、生命原理の緊要課題にもかかわらず、すべての学会と文化界は未だに^{いま}応えていない。さて体育学研究はどうするのか。

引用・参考文献

- 伴義孝（2013）：大島鎌吉というスポーツ思想、関西大学出版部。
 クーベルタン（1931）：オリンピックの回想、大島邦訳クーベルタン本 pp.15—207。
 ディーム（1949）：スポーツの本質—その教え—、

- 大島鎌吉訳、万有出版社 1955。
- デューイ（1916）：民主主義と教育、金子弘幸訳、玉川大学出版部 1984。
- 増原光彦（2015）：生産体育の意味するものを考える、『大阪体育大学 50 年誌』 p.251。
- 三宅實（1985）：こまやかな情感、『故大島鎌吉先生を偲んで』 pp.58-59、浪商学園。
- 村井実（1976）：教育学入門（上）、講談社。
- 中島直矢（1993）：大島さんと大阪体育大学、中島／伴共著『スポーツの人 大島鎌吉』 pp.63—69、関西大学出版部。
- ニーチェ（1908・歿後出版）：この人を見よ、手塚富雄訳、岩波文庫 1998。
- 西田幾多郎（1937）：論理と生命、西田全集第 8 巻 pp.273-394、岩波書店 1965。
- 西田幾多郎（1940）：日本文化の問題、西田全集第 12 巻 pp.275-383、岩波書店 1965。
- 日本体育協会（1965）：東京オリンピック選手強化対策本部報告書、日本体育協会。
- 野田敏彦（1980）：大学十五周年誌に寄せて、『大阪体育大学十五年誌』所載序文、大阪体育大学。
- 大島鎌吉（1939）：国際學生大會へ選手を送れ、『陸上日本』第 99 号 p.24、日本陸上競技聯盟編輯。
- 大島鎌吉（1947）：死線のドイツ、鱒書房。
- 大島鎌吉（1949）：スポーツと文化、『体育』12 月号 pp.45—47。
- 大島鎌吉（1955）：カール・ディーム博士の人と業績、『体育の科学』11・12 月号（日本体育学会大会記念特集号） pp.426—430、体育の科学社。
- 大島鎌吉（1965）：世紀の大会に参加して、日本体育協会編『第 18 回オリンピック競技大会報告書』 pp.4-6。
- 大島鎌吉（1973）：学校体育と社会体育の谷間、『新体育』3 月号 pp.20—23、新体育社。
- 大島鎌吉（1976）：日本的スポーツの風土、『新体育』1 月号 p.9 巻頭言、新体育社。
- 大島鎌吉（1977a）：はちゃ！の驚き、明日への展望、月刊新聞『関大』第 253 号（4 月号）、関西大学校友会。
- 大島鎌吉（1977b）：伊東春雄対談「現代スポーツ論への試み」、『体育科教育』9 月号 pp.36—42、大修館書店。
- 大島鎌吉（1980）：これからが本命、『大阪体育大学十五年誌』所載序文、大阪体育大学。
- 大島鎌吉（1982）：「オリンピック平和賞」受賞に寄せて、『月刊陸上競技』10 月号 pp.173—178、講談社。
- 大島編著報告書（1956）：立ち上るドイツ青少年—その足音と近代スポーツ思想—、全国都市体育研究協議会。
- 大島邦訳クーベルタン本（1962）：カール・ディーム編／大島鎌吉訳『ピエール・ド・クベルタン オリンピックの回想』、ベースボール・マガジン社。
- 大島邦訳ディーム本（1955）：スポーツの本質—その教え—、万有出版社。
- 岡邦行（2013）：大島鎌吉の東京オリンピック、東海教育研究会。
- シュプランガー（1918）：向上の問題、村井実・長井和雄共訳『文化と教育』 pp.251-272、玉川大学出版部 1969。
- 専門家会議（1975）：体力づくりで軟弱と文明病を克服しよう！、『体力づくり』10 月号 pp.7-25、国民体力づくり事業協議会。
- 湯浅泰雄（2005）：科学と霊性の交流時代へ、『科学とスピリチュアリティの時代』 pp.23-44、ビーイング・ネット・プレス。

（2019 年 8 月 23 日受付, 2019 年 10 月 1 日受理）